

明治四十年前後津軽地方における洋楽受容に関する考察

Acceptance of Western Music in the Tsugaru District in the Late Meiji Era.

安田 寛*・北原かな子**

Hiroshi YASUDA・Kanao KITAHARA

論文要旨

明治40年前後になると、津軽の地方紙にも音楽会や唱歌教育の具体的な内容などが掲載されるようになり、津軽地方にも西洋音楽が根づいてきていた様子を知ることができる。本稿では、最初に明治40年前後の唱歌教育や音楽会の様子を明らかにし、次いでこうした洋楽普及の際に唱法に関して、トニックソルファ唱法によるドレミ唱法と数字譜によるヒフミ唱法の二種があったと思われる点について指摘する。

最後に、これまで筆者等が行ってきた一連の明治期津軽地方における洋楽普及に関する研究の意義を明らかにするため、明治期の地方での洋楽受容研究について総括しつつ、近年の洋楽受容史研究に位置づける。

キーワード：洋楽受容史，津軽，弘前，唱歌，讃美歌，東奥義塾

1. はじめに

明治初年、弘前城内に駐留した軍隊のビューグルの音が市内に鳴り響き、明治7年末には、宣教師夫人によって初めてオルガンが弘前に到着した。明治5年の学制によって唱歌の履修が定められたとはいえ、実際には「当分之を欠く」状態であった頃、弘前には基督教の広まりとともに、オルガンの音に合わせて讃美歌を歌う人たちが出現した。明治9年7月には弘前市内の私学東奥義塾^{註1}の生徒たちが天皇の前で讃美歌を歌い、その様子は岸田吟香の筆によって広く世間にも伝えられた。明治11年には東奥義塾のカリキュラムに唱歌が取り入れられていた。明治15年開校の函館遺愛女学校では多くの弘前出身者が学び、やがて明治19年開校の来徳女学校、後の弘前女学校で教鞭をとるようになった。弘前女学校では、当時の女性としては国内最高水準の教育を受け、音楽にも造詣が深かった長嶺サダや、あるいは幼いころから讃美歌に親しんでいた成田らくなどが教職にあり、彼女らの指導を受けた卒業生たちは、近隣の公立小学校の教師として着任していった。

こうして津軽地方に基督教関係者による讃

美歌教育が展開する一方、明治12年の音楽取調掛設置以来の、公立教育機関による唱歌教育も津軽地方において徐々に広がりを見せ始める。その中心となったのは青森県師範学校で、明治18年には青森県師範学校において、音楽取調掛で学んだ傍島まねの指導が始まった。まねの指導を受けた師範学校出身者による小学校での唱歌教育は、明治20年代初頭から軌道に乗り始めた。市内各地の学校で唱歌会が開かれるようになり、時には唱歌の講習会も開催された。明治34年開校の県立第一高等女学校には、開校の年から東京音楽学校出身者が着任し^{註2}、同校で開催された音楽会は後に弘前市内の公開音楽会として発展していく^{註3}。

明治期津軽地方における洋楽普及に関して、これまで筆者等が行ってきた研究を基に概観する^{註4}と、ほぼ以上のような流れとなる。

本稿では、それに続くものとして、先ず最初に明治40年前後の唱歌教育や音楽会の様子、次に、おそらく弘前にもトニックソルファ唱法によるドレミ唱法と数字譜によるヒフミ唱法の二つが存在していたことと思われることに付いて述べる。

トニックソルファ唱法はミッションスクールで

* 弘前大学教育学部音楽科教室

Department of Music, Faculty of Education, Hirosaki University

** 東北大学大学院国際文化学会会員

Member of Tohoku University Society for International Cultural Studies

用いられた歌唱指導法であったのに対して^{註5}、文部省の公立学校では数字譜を用いた歌唱指導法が行われていた^{註6}。明治時代から大正時代にかけて我が国では、ミッションスクールのドレミ唱法と公立学校のヒフミ唱法という対照的な歌唱法が併存していたことを弘前によって裏付けることが出来る。

最後に、明治期津軽地方における洋楽普及に関して、これまで筆者等が行ってきた一連の研究も念頭に置き、明治期の地方での洋楽受容研究の意義について総括する。

2. 明治40年前後の『弘前新聞』記事に見る小学校の唱歌教育

津軽地方、とりわけ弘前を中心とした内容を報じた新聞に弘前新聞^{註7}がある。初期の部分は失われ、現在は、弘前図書館に明治39年5月24日以降のものが架蔵されている。記事には、弘前に洋楽が定着していった様子を伝えるものも見受けられる。明治39年7月12日の記事では、津軽家初代の為信公を偲ぶ「藩祖為信公三百年大祭」に市内各小学校の生徒が歌う歌として、弘前教育会の要請に応じて大道寺繁禎^{註8}作詞、楠美恩三郎^{註9}作曲で「弘前市の歌」^{註10}「ひろきめぐみ」^{註11}の二曲が作曲されたことが伝えられている。ただ、残念なことに、弘前新聞は同年九月初頭の部分が失われているため、これが歌われた様子がどのように報じられたのかについては不明である。

弘前市内のみならず、近隣の小学校の様子も報じられており、明治41年に藤崎小学校の談話会で行われた唱歌の様子を伝える次のような記事がある。

一般に上出来ならん。余は此科に於ては全く無能である故、彼れ是れ嘴を入るる権利をもたぬ。而かし感情を以て（唱者自身歌詞歌曲に化心して）唱ふ事である。聞く所によれば高等科の複音唱歌はなかなかすばらしく出来たとは其の道に心ある人の話であった^{註12}。

藤崎小学校の唱歌教育については、同校沿革史に明治35年1月29日に尋常科に唱歌を加えたと記録されている^{註13}が、それ以前にも、明治30年代になると音楽にかなり造詣の深い教師が着任していたようである。当時の学校の様子を伝える卒業生の座談会には、明治35年前にも唱歌はあったとし

て、次のような証言が出てくる。

長崎先生はじつにオルガンが好きでして、冬休みなどにはオルガンを背負っていくし、白子での運動会や遠足でもオルガンを持って行って、みんなに歌わせたものでした。また同じころ成田蔵巳という先生もおりました。成田のオルガンといえば相当有名だったと思います^{註14}。

この長崎俊作、成田蔵巳の二人に関しては、現在のところ詳細不明である。藤崎小学校には共に明治32年に着任し、それほど長い期間ではないが教鞭をとった。共に東京音楽学校出身とも伝えられる^{註15}が、藤崎小学校在職中の職名が、長崎俊作が「訓導」であるのに対し、成田蔵巳は「雇」である^{註16}。成田は、後の明治40年11月23日に青森県立第一高等女学校（現在の青森県立弘前中央高等学校）の音楽会で、先輩である東京音楽学校出身の同校教諭中島と共に出演している^{註17}。中島と共に演じた曲はメンデルスゾーンの「モデラート」やモーツアルトのソナタで、最後にメンデルスゾーンのピアノ曲独奏も行ったというから、藤崎小学校では比較的早い時期から「音楽に堪能な先生」^{註18}が在職していたということになる。

どういふいきさつで、この教師たちが津軽地方郡部の小学校に在職していたかは不明であるが、藤崎小学校が、郡部としては早い時期からオルガン購入したことも考え合わせると、同校が、唱歌教育に熱心であった姿勢を見ることが出来る。青森県の場合、たとえば小学校教員の検定試験科目についても、明治36年までは正教員、準教員共に「音楽を欠く」状態であり^{註19}、明治32年当時、藤崎小学校に音楽に堪能な教師が二人在職しているのは、決して普通のことではなかったと推察される。

その背景には、藤崎小学校で唱歌教育が軌道にのる以前に、すでに讃美歌が伝わっていたという藤崎の特異性が関係していたとも考えられる。

藤崎（現在の南津軽郡藤崎町）は、廃藩置県の後、士族帰農令を受けて、キリスト教プロテスタント・メソジスト派重鎮であった本多庸一^{註20}一家が5年ほど居住した場所であり、はやくから本多の影響でキリスト教が広まっていた。藤崎の教会にもオルガンが入っており、藤崎の人々は、はやくからオルガンの音に馴染みがあったと思われる。藤崎小学校にオルガンが到着したのは、明治28年

5月18日で^{註21}、弘前近郊の郡内小学校としては初めてであった。このとき八幡宮の神官は、オルガン購入について「耶蘇かぶれ」であると非難したと伝えられる^{註22}。

藤崎小学校の音楽教育が近隣から目立って盛んであったことは、キリスト教会の音楽活動の影響であったのかどうか、いずれにしても、藤崎小学校は、津軽地方の小学校への唱歌普及を考察する際に、非常に興味深いケースとなる学校である。

3. 青森県師範学校の唱歌教育

次に現在の青森市にあった青森県師範学校内の、唱歌教育の様子を伝える記事について述べる。次に掲げるのは明治41年1月19日付『弘前新聞』に掲載された、同新聞記者による学校観察記である。

唱歌室に入ると一人の教生はオルガンを前に静かに生徒の着席を待つ、黒板には「豊年祭」という唱歌が記されて、約五十名の幼き生徒の琴線が、今一斉にその胸奥より奏づらるるのである。臆がて着席の礼はオルガンの吹奏と共に行われて、可憐の児童は各栗鼠の様な小さき眼を輝かして先生の指揮を待って居る。

先生は豊年祭という意味を説明した後、「私は一遍やって見ませう」とてオルガンに合わせて次の唱歌を歌い出した。

「今年はお米が沢山とれたそれを祝ふてほうねんまつり」

誠に簡単な唱歌であるが、児童の耳には高尚にして且つ優婉に響いたであろう。いづれも耳を澄して聞惚れて居る。先生と云うのは年ハ廿ツ許りの青年、極めて円満な人好きのある顔をして、破れた洋服のズボンを意とも為無げに立って生徒の呼吸を整ひさして居る。純潔な青年と無垢な児童が一堂の下に楽器を奏して天来の美妙を感得する時彼等の胸中如何なるインスピレーションが湧くであろうかと、自分は渺らざる興味をもって耳を聳てた。続いて男女の生徒が一斉に声をオルガンに合わせて「コートシハ」を歌ひ出でたが、得ひ云われぬ興味聴く者をして自ら物我を脱却せしむるの概がある。だが教師としてはそれ相応に未熟な点も和解ると見えて、今度は組を分けて一組づつ試みる。「ソーレヨイハフテ」の処がいけませんから今一遍などと丁寧反復に教える。概して女の児の方は唱歌

に興味を持って居ると見えて、声も立てば節も上手である。一応の練習が済んで更に「年の暮」「餅搗き」などをおぼひした。「春は来しかと思ふまに何時か木の葉は青く成り……」中にも此「年の暮」と云ふのは非常に面白く聴かれた。僅かに廿幾分と云ふ授業だから、飽かぬ間に再び振鈴が響いて先生はオルガンを離れた。五十の児童は茲に一時間の科程を卒へて元来し廊下を控所に行くのである。

この記事は、青森県師範学校の教育実習風景を今に伝える、貴重な証言となっている。明治18年から明治24年まで、メソジストミッションの影響を濃くうけた東奥義塾からの借り物のオルガンで音階を「ヒフミヨイムナヒ」と教えた^{註23}唱歌教師傍島まね以来、青森県師範学校には、白井規矩郎、北村季晴と東京音楽学校卒の教師も在職していた^{註24}。明治38年10月7日には、同校音楽教育の基礎を築いたと評される釜苞善作^{註25}が着任し、上記の授業が行われた明治41年当時は、すでに校友会の中に音楽部があり、時折演奏会を開いていた。

弘前新聞などからその曲目を知ることが出来る。たとえば明治41年2月17日には、来賓生徒父兄あわせて三百人あまりの聴衆を迎えて開催された演奏会の曲目が掲載されている。おおむね歌唱が主であるが、中に少ないながらオルガンやピアノ、ヴァイオリンの演奏をするものも出て来ている^{註26}。

こうした青森の師範学校音楽部の活動に対し、弘前の東奥義塾では、トニック会というきわめて興味深い名称を付した音楽部が、やはり明治四十年前後に作られていた。東奥義塾の学校史などにはほとんど出てこないこのトニック会の様子は、新聞記事によって窺い知ることが出来る。次にこの東奥義塾トニック会について述べる。

4. 東奥義塾トニック会

東奥義塾トニック会に関して、最初に言及すべきは、その名称である。いうまでもなくこれはトニックソルファ唱法に由来すると考えられる。明治期には歌唱法として、「ドレミファソラシド」を用いたトニックソルファ唱法と「ヒフミヨイムナヒ」を用いた2種類の階名唱法が存在した。音楽取調掛では数字譜によるヒフミ唱法を用いたことから、同校で学んだ卒業生が地方の師範学校などで教える際も、同様な階名唱法を用いたと考えられる。前述したように、青森県でも傍島まねが

「ヒフミヨイムナヒ」と教えていた。これに対し、キリスト教関係者による讃美歌教育では、「ドレミファソラシド」のトニックソルファ唱法が中心となった。弘前女学校に多く教師を送りだした函館遺愛女学校でも、1895年以降ミス・シンガー（Florence Elton Singer）が学校全体の女生徒達にトニック・ソルファメソッドを教えている^{註27}。

二つの異なった唱法が、弘前と青森に存在したということであろう。これは、とうじ日本全体に、師範学校には数字譜によるヒフミ唱法があり、キリスト教系の学校では「ドレミファ」によるトニックソルファ唱法があったことのよき例示と見られる。

東奥義塾トニック会がいつ結成されたのか明らかではないが、その活動が最初に登場するのは、同校が明治39年に発行した『塾友』第6号である。天長節の余興であった音楽演奏について、次のように伝えている。

各々美服を着け、手に楽器を取りて奏したる様、決して素人音楽隊と見受けられず。聴衆皆其の技の妙なるに感服しぬ。やがて柔道あり、柔道の余興として軽業あり、次いで小山先生のヴァイオリン独奏あり、トニック会の唱歌ありなり^{註28}。

トニック会が出来た背景を伝えるものに、西海沈澍生という名で「東奥義塾と唱歌科」と題して書かれた明治40年12月11日付の弘前新聞記事がある。

音楽教育は徳性の涵養美的情操を与え思想の向上精神、人格に修養に偉大なる効果を有するはその局にいたる人の近時盛んに唱道する処なり。文部省はこれを必修科と定め音楽学校に命じて教科曲を編纂せしめつつあり、その中等教育に必要な事吾人の論述を要せざる處なり。我歴史ある弘前中学東奥義塾は茲に見る處あり。夙に青年教育と音楽の感化との必要を認め我が青森県の県立中学を凌駕してこれを必修科に加え、爾来その成績頗る見るべきものあり。その青年音楽教育に「ピアノ」の必要を認むるやその学校の経済を以てこれを購求する能わざるを知り前音楽教師小山氏自ら万難を排し東西に奔走し、義金を蒐集しこれを購求し得たり。

ここにでてくる小山敏彦の経歴などに関しては、今のところ不明である。しかし、明治37年10月31日より明治40年9月13日まで、「助教諭心得」として在職し、塾生への楽器の指導も行なうなど、東奥義塾の音楽教育に力を尽くしたようである。また、このトニック会自体が、単なる生徒の集まりとも言えない性格を持っていたらしいことは、ピアノを購入するための新聞広告に「弘前中学東奥義塾内トニック会」として当時の塾長杉山壽之進など、同校職員が名を連ねていることからわかる^{註29}。

トニック会では卒業生ならびに有志の賛助により、五百五十円にてピアノを購入し、明治39年11月3日に寄贈式を行った^{註30}。

トニック会の実際の演奏活動はどのようなものであったのだろうか。明治39年6月29日付『弘前新聞』掲載の演奏会プログラムは、次のようになっている。

「トニック会の音楽演奏会」

東奥義塾内のトニック会にて来る七月一日午後一時より第3回音楽演奏会を催ふす由は既報の如くなるが其の番組左のごとし

第一部

- 一、ピアノ連弾・・・甲（君が代）乙（コツトゼーブザング）小野襄先生、小山敏彦先生
- 一、独唱（ライトファオエー）佐藤暁氏
- 一、オルガン独奏（マーチ）木村亮氏
- 一、合唱 甲（今日より友）乙（哀れの乙女）
会員有志、ジュナーベル氏曲
- 一、尺八（松風の調）小野美則氏、川村謙治氏、
- 一、唱歌（春山樵夫）会員有志、北村季晴氏
- 一、オルガン、ヴァイオリン合奏、マーチ、（ビューキフルリバ）奈良義雄先生、桜庭順三先生
- 一、ピアノ獨弾・・・甲（スタデー）乙（ロチスターショウテス）小山敏彦先生

第二部

- 一、オルガン獨奏（プルセスマーチ）三上貞氏、
- 一、唱歌・・・甲（花見）乙（琵琶湖）会員有志
- 一、ハモニカ獨奏・・・甲（ワルツ）乙（千代の御岩）佐藤暁氏
- 一、オルガン、ヴァイオリン合奏（蛍の光）奈良浄先生、奈良善雄先生
- 一、ヴァイオリン獨奏・・・甲（ローマンス）

乙（ラバリシエンネ）小山敏彦先生

一、獨唱（亡妹）柏城朝寛氏

一、尺八（三谷）小野美則氏，川村謙治氏，

一、合唱（閉塞隊）会員有志，里部峯三郎氏作
歌歌曲

いろいろな曲に混じって、「コツトゼーブザング（God save the Queen）」「蛍の光」「ビューキフルリバ（Beautiful River）」など、讃美歌と思われる曲が入っていることが注目される。

また、先に青森県師範学校教諭であった北村季晴の名前が出てくるとも興味深い。北村自身、東京音楽学校で学ぶ前は明治学院で基督教に触れており^{註31}、青森県師範学校在職中に東奥義塾関係者と交流があったことを窺わせる。

こうしたトニック会のような組織は、同じ市内にあり、同じように男子校であった弘前中学には見受けられないものである。普通教育を行った男子校での音楽教育がよほど目を引いたのか、弘前新聞には多少非難めいた論調の記事が掲載されたりした^{註32}が、約一週間ほど後には訂正記事が出た^{註33}。明治40年6月9日付『弘前新聞』には、東奥義塾の奏楽堂で熱心にピアノに向かう小山教諭や練習に励む東奥義塾生の様子が伝えられている。

東奥義塾トニック会がその後どういう状況にいたったかは不明であるが、前出の明治40年12月11日付の弘前新聞記事によると、小山教諭が去った後は衰微していったようである。明治40年代と言えば、東奥義塾自体が存続問題で揺れていた時期で、明治43年には県立に移管、大正2年に一端廃校となった。こうした事情で、徐々に発展していったと見られる青森県師範学校の音楽部とは対照的な経路を辿ったのが東奥義塾トニック会であったのであろう。

5. 結びに替えて—明治期津軽地方における洋楽受容研究の意義

明治は、言うまでもなく、現在の我々の音感覚の基礎が出来た時期である。鎖国の影響もあり、ほとんどの日本人にとって、それまでなじんだ邦楽とは音組織がまるで違う洋楽は、最初は理解不可能ではなかったかと推察される。実際、歌おうにも音程がとれず、幕末から続々と来日した宣教師達は、当初日本人の音感覚に苦慮し、日本人に西洋音楽の歌唱指導を行うのは不可能ではないかと認識していた。明治16年になっても多くの宣教

師はこうした見解を持っていたという^{註34}。しかし、現在、我々の周りにはありとあらゆるところに西洋音楽があふれ、逆に邦楽に対して親しみを持たない人たちが増えている。

いわば国民全体の音楽に対する感受性がかかるほどに西洋音楽が普及した理由は何か。この問題に対して、以前は唱歌教育のかなめであった音楽取調掛の業績のみが注目され、その研究が蓄積されていった。しかし、地方の実情に関しては、それほど取り上げられてはいなかったといえる。たとえば、山住正己も、1967年刊行の『唱歌教育成立過程の研究』において、今後の課題として唱歌教育の地方への普及過程を明らかにすることをあげている^{註35}。それから5年後、洋楽受容史を研究していた馬場健は、やはり音楽取調掛の事業が実際に各地方でどのように受け止められ、消化吸収されたかという〈地方の実情〉には、未だほとんど手が付けられていないと指摘した^{註36}。さらに30年を経過しようとする現在においても、地方の洋楽受容史研究は、決して多くはないのが実態である。唱歌教育に関して取りあげられた地域は、愛知、長野、岩手、山口そして弘前などである^{註37}。

地方から中央へと目を転じると、平成5年頃からは、塚原康子などによる洋楽受容史に関して新資料に基づいた意欲的な研究が続々と刊行され、研究の流れが大きく変わった。なかでも注目すべきは、越川美津子、赤井励、エヴァルト・ヘンゼラー、中村理平、安田寛によって、それまで見過ごされてきた基督教の讃美歌と聖歌の重要性が指摘されるようになったことであろう。たとえば洋楽受容史研究の中でも金字塔とも言うべき業績を上げ、学術研究としての洋楽受容史の確立を最優先し、続く研究者に自ら集めた資料を積極的に公開した中村理平も、その著書のおわりに「本書を”日本近代洋楽受容史序説”と位置づけ、基督教音楽移入の歴史に関する新たな研究を、今後の宿題として自身に課す」^{註38}と、洋楽受容史研究の緊要な課題を記していた。また、フェリス女学院大学付属図書館山手別館室長としてこれら研究者の資料照会に丁寧に応じ、国立音楽大学の松下鈞とともにシンポジウムの企画によって^{註39}彼らをはじめとする洋楽受容史の研究者の交流と研究の発展を大いに促進した手代木俊一の功績も見逃せない。手代木によって1999年に上梓された『讃美歌・聖歌と日本の近代』^{註40}は、前述の越川、赤井、中村、安田が上記の研究に使用した資料を公

開し、彼らの研究をまとめて紹介したものとなっている。^{註41}

こうした洋楽受容史の流れを念頭に置いたとき、地方の唱歌教育資料の掘り起こしと、讃美歌音楽の影響の解明が、これまで以上に重要な課題として浮かび上がってくる。上記の音感の変化を問題にすると、当時の国民の大多数を占めていた地方の庶民について洋楽受容史を明らかにすることは、すなわち日本人全体の音感がなぜ変化したのかという疑問に対する示唆につながる可能性が大きいのである。

その際、津軽地方の洋楽受容研究がきわめて重要な存在となる。一つは、戦災を逃れた資料が多く残されていることであり、他の一つは、ミッションスクールの讃美歌教育と公立学校による唱歌教育が併存した地域であることから、日本人の音感の変化に果たした、讃美歌教育と唱歌教育の比重と相互関連とを明らかに出来る格好の地であることがその理由である。

これまでの一連の研究において、我々は、音楽取調掛が設置させるだいぶ前から津軽地方にはすでに讃美歌を通して洋楽に親しむ人々がいたことや、弘前女学校出身者のように讃美歌を通じて洋楽の素養を身につけた公立小学校教師がいたこと、尋常小学校唱歌作曲に関わった楠美恩三郎のそだった背景にキリスト教の影響があったことなど、きわめて興味深い事実を明らかにすることが出来た。

音楽取調掛の唱歌教育事業が軌道に乗っていく一筋の過程のみが日本人の洋楽受容だったのではなく、それと平行して、あるいは交差し、あるいは重なったりしながら発展していった讃美歌教育もまた、日本人の音感覚形成に大きな役割を果たしていたことを見逃してはならない。明治期の津軽地方は、日本人の洋楽受容のこうした特徴をよく呈示してくれるものなのである。

註1 明治五年設立の私立学校。旧藩学校の教員組織、学校設備をほぼ継承し、多くの人材を輩出した。また草創期より洋学教育に力を入れ、外国人宣教師を教師として雇用した。私立ゆえに独自の教育を展開したが、財政難のため明治33年に弘前市立、明治43年に青森県立となり、大正2年に一度廃校となった。大正11年に再興され、現在は弘前市の東奥義塾高等学校となっている。

註2 明治三十四年六月二十二日付けで、東京音楽学校助教授であった小関得久が音楽担当の教諭で着任している。『八十年史－青森県立弘前中央高等学校』青森県立弘前中央高等学校創立八十周年記念行事実行委員会編、昭和五十五年、p.64.

註3 『八十年史－青森県立弘前中央高等学校』青森県立弘前中央高等学校創立八十周年記念行事実行委員会編、昭和五十五年、pp.92-94.

註4 筆者等は平成10年以降、津軽地方の洋楽受容研究に関して以下の共同研究を行っている。安田寛・北原かな子「弘前における洋楽受容のはじまり」『弘前大学教育学部紀要』第79号（弘前大学教育学部、平成10年3月）、「弘前と遺愛女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』第80号（弘前大学教育学部、平成10年10月）、「楠美恩三郎と弘前」『弘前大学教育学部紀要』第81号（弘前大学教育学部、平成11年3月）、「弘前女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』第82号（弘前大学教育学部、平成11年10月）、「明治期津軽地方における讃美歌の受容－明治初期から三十年代まで－」『弘前大学教育学部紀要』第83号（弘前大学教育学部、平成12年3月）

註5 ミッションスクールで行われていたトニック・ソルファ法については、中村健「CHURCH SAMBIKA考－明治期の神戸女学院の女学生は皆コントラルト？『新撰讃美歌』ソルファ写本をめぐって」（神戸女学院大学『新撰讃美歌』研究会編『新撰讃美歌』研究』新教出版社、1999年）157-191頁が参考になる。

註6 数字譜による唱歌教育については、阪田久美「わが国の唱歌教育における数字譜の導入と変遷－明治・大正期の唱歌教科書・指導書の分析を通して－」（上越教育大学大学院、修士論文、1997年）が参考になる。

註7 本稿で引用する弘前新聞は、弘前市立図書館所蔵である。尚、引用に際しては、かなの旧字体は新字体に改め、読みやすくなるよう、句読点を追加した。また、この新聞資料収集は、青森県史の資料収集の一環として行ったものである。

註8 大道寺繁禎（だいどうじしげよし、1844-1919）津軽家最後の藩主12代承昭公の家老を勤め、廃藩以降は県政に貢献する。また五十九銀行の創始者でも有り、津軽地方の政治経済において大きな影響力を持った人物である。

註9 楠美恩三郎（くすみおんさぶろう、1868-1927）東京音楽学校教授。東奥義塾、青森県師範学校、東京音楽学校出身。楠美恩三郎に関しては、安田寛・北原かな子「楠美恩三郎と弘前」『弘前大学教育学部紀要』第81号（弘前大学教育学部、

平成11年3月)参照のこと。

註10 「弘前市の歌」の歌詞は次のようになっている。

第一節

ここは昔の、鷹ヶ岡、麓流るる岩木川、船をつ
なきし鶴亀の、松の千年も、動かじと、城も家
居も、築かれし、時は慶長十五年。

第二節

末弘前の、名もしるく、国の鎮めの、八師団、
今は置かれて、また守る、人もつとへば、なり
はひの、道も開くる、此の市は、千秋万歳、栄
ゆべし。

尚、この記事では、この歌詞について、第一節
の「鷹ヶ岡」の地名の由来や、「鶴亀の、松の
千年」という部分に、疑義を呈している。

註11 「ひろきめぐみ」の歌詞は次のようになっ
てい

第一節

岩木の山の狩り場にて、練りし兵ひきまとめ、
恨み重なる石川の、城は一夜に責め取りぬ。

第二節

あまる力に、和徳川、水の淀まず責め寄せて、
降す津軽の十餘城、揚げし勝鬨、幾千度。

第三節

六の郡を、恢復し、国の基を、うち堅め、仇も
味方も、祭りつつ、廣きめぐみは、清水森。

第四節

この大御代に、なりぬれど、百年三度かさねた
る、君が勲は、みな人の、仰がざらめや、忘れ
ぬや。

なお、この記事の中では、歌詞中第三節の「広
きめぐみは清水森」に関して、清水森地区に祭
壇を築いて戦死者の霊を弔った歴史的背景を知
らなければ、歌詞の意味するところがわかり難
いという指摘がなされている。

註12 『弘前新聞』明治41年3月20日付

註13 「大正拾参年度改 保存年限永年 沿革史 藤
崎小学校」明治35年度。頁数の記載なし。(藤崎
小学校所蔵資料)。

註14 藤小百年史編集委員会編『藤崎小学校百年史』
昭和49年11月3日, p. 53.

註15 藤小百年史編集委員会編『藤崎小学校百年史』
昭和49年11月3日, p. 41.

註16 長崎俊作は明治32年4月就職, 同36年3月退
職。成田蔵巳は明治32年8月就職, 同33年12月
退職。(「創立以来ノ職員」藤崎小学校所蔵資料)

註17 『八十年史—青森県立弘前中央高等学校』青森
県立弘前中央高等学校創立八十周年記念行事実
行委員会編, 昭和五十五年, pp.93.

註18 藤小百年史編集委員会編『藤崎小学校百年史』
昭和49年11月3日, p. 53.

註19 青森県教育史編集委員会編『青森県教育史』
第三巻資料編I, 昭和45年, pp.825-826.

註20 本多庸一(ほんだよういつ, 1848—1912) 合
同メソジスト派初代監督。明治三年から藩命に
より横浜で英学修業をする。バラについて学び、
弘前では初めて洗礼を受けた人物である。津軽
地方へキリスト教が普及していく上で、中心的
役割を果たした。また、東奥義塾の礎を築き、
弘前女学校初代校長、青山学院長などを勤める
など、教育界にも多大な貢献をしている。

註21 「大正拾参年度改 保存年限永年 沿革史 藤
崎小学校」明治28年度。頁数の記載なし。(藤崎
小学校所蔵資料)。

註22 藤小百年史編集委員会編『藤崎小学校百年史』
昭和49年11月3日, p. 53.

註23 明治22年12月卒業の坂本紋作の記述による。
坂本紋作「約五拾年前」『60周年記念誌』青森県
師範学校, 昭和12年, p. 288.

註24 岩泉亀松編『創立四十年記念帖』青森県師範
学校同窓会, 大正4年。

註25 釜菴善作(かまやちぜんさく, 1877—1922)
明治31年青森県師範学校卒業の後、東京音楽学
校に進学する。卒業後は神戸高等女学校勤務の
後、青森県師範学校に着任し、音楽を指導した。
門下生から多くの音楽家が出ている。

註26 この音楽会はその後も続いたらしく、大正14
年頃のプログラムでは歌唱が減り、ピアノやオル
ガンの演奏が増えている。ピアノ曲もハイド
ンのソナタやクーラウのソナチネ、乙女の祈り、
など曲のレベルも格段に上がっている。パイオ
リンもベッリーニのノルマの変奏曲などがあり、
明治末期に比べて同校音楽水準が非常に高くな
ってきていたことがわかる。(上林朝次郎編『五
十年記念號』青森県師範学校校友会雑誌部, 大
正十四年, pp. 145-149.)

註27 "Thirteen girls have received organ lessons during
the year, and the whole school has received vocal
lessons by the Tonic Sol Fa method, which is so
well adapted to the Japanese, teaching them pure
tones in a simple and attractive manner." Minutes of
the Twelfth Session of the Woman's Annual
Conference of the Methodist Episcopal Church in
Japan, 1895, p. 35.

註28 『塾友』第六号(東奥義塾塾友会, 明治三十九
年一月十五日) p.69.

註29 『弘前新聞』明治39年8月14日

註30 「東奥義塾とピアノ寄贈式」トニック会主唱の
下に全塾へ寄贈すべき日露戦争及び藩祖三百年
祭記念ピアノは一昨日東京より到着せしが全会
にては本日の佳辰をトして之が寄贈式を行う由、

- 附記、右の価格は五百五十円にして予算を超過せるより不足分は各有志者より更に募集する者なりと云ふ。(明治39年11月3日付『弘前新聞』)
- 註31 中村左伝治『「信濃の国」物語』(信濃毎日新聞社、1978年) p. 251-258。
- 註32 「東奥義塾トニック会に就て」(前略)・・・実際彼らは此の如く音楽の趣味を有し熱心に研究しつつ有るやと云うに去る十四日の唱歌時には三十余名の会員我先にと退下して残れるは僅かに一名のみ。多くは唯一時の面白さに雷同するもののみ。尚会長は助教諭某にて昨年内室を高等女学校卒業生より迎えたるやにてトニック会も同女学校生徒中の或る部分と少なからぬ関係を有し既に世間にてはトニック会支部は同女学校内に設けあり等と風評するも。莠々斯会の如きは青年男女の往来を頻繁にし従って悪風の生するなきや等と心痛する人もありて余程考すべきものなり。且つ東京その他の地方にても中学生にしてトニック会を設立し居るものは無之由某教育家は語れり。(明治40年1月17日付『弘前新聞』)
- 註33 「東奥義塾トニック会の近況」に就て同会の某氏より聞く所によれば昨今去年学校に寄せしピアノの不足金整理中の由なるが此金子は大凡百五十円位にて不日取纏まる見込に付紀元節頃右奉呈式を兼て演奏会を開かんと協議中の事。夫が為め庶務煩雑にて此学期中には未だ一回も練習会を開かざる由なり。尚高等女学校に支部等は更になしという。(明治40年1月25日付『弘前新聞』)
- 註34 安田寛『唱歌と十字架—明治音楽事始め—』(音楽之友社、平成三年) p. 90.
- 註35 山住正己『唱歌教育成立過程の研究』(東京大学出版会、昭和42年) p. 8.
- 註36 馬場健「明治前期「唱歌の胚胎」—旧く開智学校>資料を中心に—」『音楽教育研究』75号、音楽之友社、昭和47年。
- 註37 村尾忠廣「学校唱歌の開設と地方への普及」東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社、昭和五十一年。馬場健「明治前期唱歌ノ胚胎」『音楽教育研究』75号、1972年、20-29頁。馬場健「明治前期唱歌ノ胚胎承前」『音楽教育研究』76号、1972年、20-31頁。吉田久五郎「岩手県における唱歌教育の普及過程について」『音楽教育学』第二号、1972年、梶田清七『山口発信唱歌の航跡』朝日新聞社西部事業開発室編集出版センター、平成8年。そのほか、笹森建英、今井民子「地方に於ける音楽の普及—明治期の弘前市における唱歌教育—」(『弘前大学教育学部教科教育研究紀要』第一四号、1991年)。笹森建英、今井民子「明治期の和徳小学校の唱歌教育」(『弘前大学教育学部教科教育研究紀要』第一八号、1993年)。
- 註38 中村理平『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説—』(刀水書房、1993) p. 741.
- 註39 1991年12月、東京、国立音楽大学教育センター主催、洋楽受容史再考：讃美歌の歴史的発展と我が国の音楽への影響、発表者：手代木俊一、エヴァルト・ヘンゼラー、中村理平、安田寛。1993年10月、函館、音楽図書館協議会主催、洋楽史再考：洋楽発祥の地としての函館、発表者：手代木俊一、中村理平、安田寛、佐藤秀夫ほか。1994年6月、東京、国立音楽大学教育センター主催、洋楽史再考：洋楽受容史における女性たち、発表者：安部純子(横浜プロテスタント史研究会)、平高典子(玉川大学)、小檜山ルイ(関東学院大学)ほか。1996年7月、京都、京都国際セミナー1996組織委員会主催、「異文化交流と近代化—京都国際セミナー1996—」。最後のセミナーについては、松下鈞編『異文化交流と近代化—京都国際セミナー1996—』(大空社、1998年)を参照。
- 註40 手代木俊一『讃美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社、1999)。
- 註41 この本は、著作者の資料公開の仕方とまとめ方に問題があり、引用には注意が必要である。